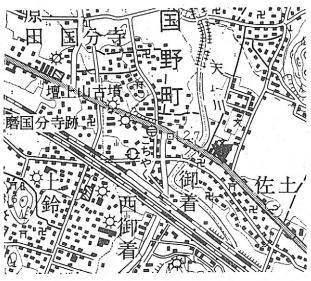
兵庫・御着（ごちゃく）城跡

1　所在地　兵庫県姫路市御国野町御着字城ノ内
2　調査期間　一九七七年（昭52）四月～一九八〇年（昭55）三月
3　発掘機関　姫路市教育委員会
4　調査担当者　山本博利・秋枝　芳
5　遺跡の種類　中世城郭（平城）
6　遺跡の年代　室町時代～安土・桃山時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

御着城は北と東に四重の堀を廻らし、西と南は天川を外堀に利用した二重の堀で囲繞されており、五〇〇m^2の規模をもつ惣構の城郭である。戦国時代には赤松氏の被官小寺氏の居城として、また後に筑前福岡城主となる黒田官兵衛孝高が家老として仕えた城としても著名である。小寺政職の代に羽柴秀吉の播磨攻略により、三木城と相前後して、一五八〇年（天正8）に落城した。落城後は廃城となり、明治以降本丸跡から二ノ丸跡にかけて小学校用地となった。小学校移転後に姫路市で跡地の再開発事業が計画され、これに伴い姫路市教育委員会は昭和52年より計四次の発掘調査を実施した。

調査の結果、一四世紀後半～一六世紀後半の遺構及び遺物が検出された。一六世紀後半は本格的な城郭としての縄張りが実施された時期で、井戸、石組溝、礎石建物跡等が検出された。二ノ丸跡中央部で井戸が確認され、この井戸の排水溝として源を発する石組溝は途中で複雑に屈曲し、二ノ丸跡東北隅に至って堀へ落ちる。この石組溝は二ノ丸跡の基本的な排水施設としてではなく、二ノ丸跡の細かい区割りの機能をも有していたものと思われる。石組溝にそって礎石建物跡、石組施設、くど等が検出され、城が計画的に造営されていることが確認された。

木簡は二ノ丸跡中央部の井戸より一点出土した。井戸は石組で内径〇・九m、深さ六・五mを測る。基底部は偏平な石を二段に積み重ねた堅固なもので、不等辺七角形を呈する。上層は石製品、備前焼、瓦、石等で埋められていた。下層の泥土層より木簡、将棋駒、下駄、櫛、備前焼等が豊富に出土した。上層出土の備前焼参石甕は一五七一年（元亀2）銘入りの大甕（岡山県立博物館蔵）の直前に位置づけられ、下層出土の備前焼とほとんど大差の認められないことから、井戸の時期が限定される。



（姫路）

8　木簡の釈文・内容

「□□十」　124×22×3　033

9　関係文献

姫路市教育委員会『御着城跡発掘調査概報』　一九八一年

（山本博利・秋枝　芳）